



農工通信



第70号



平成10年から12年2月にかけて皆様のご尽力を頂いた東京農工大学創立50周年記念会館(50周年記念ホール)が同大学本部にある武蔵野荘に隣接し、本年3月15日に竣工となりました。この会館の多目的会議場では、同窓会常務理事会、東京支部総会準備会等が開催され、そのほか様々な会議に利用されております。

も く じ

- | | |
|-------------------------|---------------------------|
| ○新しい試み …………… 2 | ○掲示板 |
| ○学園だより | 記念碑「東京高等蚕糸学校発祥之地」の復元 ……14 |
| トレーサビリティ・地産地消システム構築へ… 3 | 農工大 TLO 報告 ……………15 |
| 「ナノ未来材料」が目指す世界最高水準の | キャリア・アドバイザー(進路相談員)制度 |
| 研究教育拠点 …………… 4 | がスタート……………15 |
| おかしな食文化 …………… 5 | ○東京農工大学後援会の活動 ……………16 |
| 新エネルギー・物質代謝と生存科学の構築 … 6 | ○平成14年11月1日現在同窓会会員数 ……16 |
| ベストティーチャー賞について …… 6 | ○慶弔 ……………16 |
| クローンマウスと ES 細胞 …………… 7 | ○同窓会支部長及び支部連絡先 ……………17 |
| ○支部総会の活性化について …………… 8 | ○事務局だより ……………18 |
| ○部会・支部だより …………… 9 | ○編集後記 ……………18 |
| ○クラス会だより ……………12 | |

新しい試み

理事長 小原嘉明 (農S39)



同窓会の活動をいくらかでもレベルアップする。これは今期の同窓会理事会に課せられた課題です。この線に沿って理事会は春以来、微力ながら努力しております。そこで今回は同窓会活性化のために理事会が試行し

てみたいと考えていることのうち、2点について紹介したいと思います。

第一は同窓会誌、「農工通信」の魅力アップです。「農工通信」は全国の同窓会会員を縦横断的に結びつける唯一の媒体です。「農工通信」はいわば本学同窓生が行き交う交差点であり、憩いの場であり、人だかりの場であります。多くの同窓生はここで母校の発展や同窓生の活躍、動向などのニュースに触れ、母校や旧知に想いを馳せ、若き日々を想起して明日への活力を醸成します。

「農工通信」はこの点で一定の機能を果たし、効果を上げてきました。しかし工夫次第で「農工通信」はさらに魅力を増し、より多くの人があるところに集うようになることが期待されます。「農工通信」の魅力アップを期待する声はこれまでも何度か聞こえていました。

しばしば聞こえてくる声は、「農工通信」の名称です。一工夫すれば同窓生が喜びと誇りを持って愛着する名称があるのではないか、という期待を込めた声にならずに同窓生も結構多いと考えられます。しかしこの名称変更は広く皆さんのご意見も伺う必要があるのです、これは将来の検討事項ということでしょう。

「農工通信」の全体的なスタイルについては、いろいろなアドバイスやアイデアが寄せられています。その一つは文章や文言にやや官報臭を感じる、との忠言です。なるほどこれはごもっとも、と思われるふしがあります。官報臭の排除は編集部の努力目標として取り組みたいと思います。

内容についても建設的なアドバイスが寄せられています。例えば各界の第一線でご活躍の同窓生の話しや、会員からのユニークな経験などについてご寄稿をおおぐのはいかがでしょうか。学内の先生に、その分野の最先端の話題を分かりやすく噛み砕いて

紹介してもらうのはどうか。いわゆる狂牛病やナノテクノロジー(10⁻⁹mレベルの超微細技術)など、今日的な社会問題の分かりやすい解説記事が欲しい。大学の主要な構成員である後輩の学生の意見、近頃の学生気質、学生生活など、学生に関する記事があってもいいのではないかと。学生の目から見た大学、大学教員、講義に対する評価、あるいは各界の先輩との会見記事もあればいい。少し枯れた随筆もおもしろいのではないかと、などなどアイデアはいくつか提出されています。

これらの意見は、総じて見ると上から下への官報型同窓会誌から、さまざまな同窓生が行き交う交差点型同窓会誌、あるいは会員参加型の同窓会誌を示唆しているとも言えるかも知れません。一方、これに伴ってこれまで紙面をにぎわしてきた支部総会便りなどの記事は、かなり大幅に縮小せざるを得なくなると思われます。いずれにせよさらに皆さんのご意見を参考にしながら、和気あいあいの交差点になるような「農工通信」を目指したいと考えています。

第二は支部総会の活性化です。支部総会については、総じて若い年齢層の同窓生の参加が少なく、いまいち活気に乏しい、という声がかつどの支部で聞かれます。なぜそうなのかについては、若年層の同窓生に訊いてみる必要がありますが、支部総会の魅力がイマイチだ、ということが一因である可能性もあります。もしそうなら決算報告とそれに続くパーティ、という支部総会のあり方は一工夫必要かもしれません。

この点、お酒を飲みながらの講演会に、私はひとつの可能性をみています。私事ながら、私は宮城県支部や千葉県支部など数支部でミニ講演会を試行してきましたが、漫談代わりの講演はそれなりに酒の肴になったと聞いています。学内にはそのような講演で皆さんを楽しませてくれる教員は数多くいます。機会を見てどのような話題を提供できるか、皆さんにお知らせ致します。この種の講演会は、各支部においてぜひにも試行されんことを望みます。

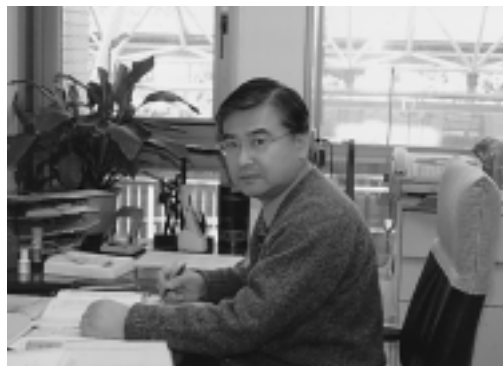
以上、同窓会の活性化に向けて理事会が試行しようと考えている計画です。これについて皆様もぜひご意見、アイデアなどをお寄せ下さい。

学 園 だ よ り

トレーサビリティ・地産地消システムの構築へ

大学院農学研究科 矢口 芳生 (蚕糸S51)

2001年9月、日本で第1号のBSE、いわゆる狂牛病の発生が確認されて1年がたった(02年8月末までに5頭確認)。発生後直ちに、感染源と疑われる肉骨粉(家畜の骨や内臓など食肉以外の部位を原料とする飼料)の輸入、流通、使用を全面停止した。これを機に、日本もトレーサビリティ・システム(食品等の生産、加工、流通、販売の各段階の情報を遡及して調査、確認できる体系)の導入に踏み切った。



また、02年7月にはBSE対策特別措置法が制定され、飼育中死亡した2歳以上牛の検査を義務付け、肉骨粉の使用禁止、BSEによる経営不安定への措置、などを講じることになった。BSEは畜産農家、焼肉屋も含め牛肉販売店、そして消費者にとって影響があまりにも大きいものとなった。

BSE問題のさなか、今度は中国産冷凍ホウレンソウから食品衛生法の基準値を超える残留農薬が検出されるという事件が発生した。02年1月、厚生労働省が生鮮野菜を集中的に検査した結果、2,515件中オオバナなどに9件の違反があったのである。3月には8.8%にもものぼる冷凍野菜の違反、6月に入っても次々と基準値を超える冷凍ホウレンソウが見つかった。

ほとんどが有機リン系殺虫剤のクロルピリホスで、基準値の250倍のものもあり、また国際的に製造・使用が禁止されている有機塩素系殺虫剤のディルドリンも見つかった。日本は、中国から冷凍野菜を約35万トン輸入、うち冷凍ホウレンソウは約5万トンを輸入していた(2001年)。

さらに02年5月末には、食品衛生法で認められていない食品添加物(香料)を製造・販売し、それを使った食品を販売したため、発覚後多くの食品メーカーがそれらを回収するという事件もおきた。厚生労働省の調べでは、02年6月から過去1年間で少なくとも16社が、15種類の無認可添加物を製造・輸入販売、これら添加物を使った食品を販売した企業を含めると延べ291社にのぼる。多くは国際基準では安全とされるが、発ガン性が指摘される物質も含まれていた。

食品の安全性への信頼が大きく揺らぐなか、02年1月以降次々に大手食品メーカーの国産偽装事件、また無登録農薬使用事件も発覚した。

これらの一連の事件をとおして、企業のモラルも含め食品安全の構造的な検証の必要性が認識されるようになった。

関連法がなかったわけでない。JAS法の改正により、00年7月からすべての生鮮食品や加工食品・飲料を対象に品質表示・原産地表示が義務付けられ、違反すると改善命令のほか、事業者には50万円以下の罰金が科せられるようになった(02年6月改正し、個人100万円、法人1億円以下の罰金に)。有機農産物、遺伝子組み換え食品も、十分ではないが表示が義務付けられた。

今後は、このような表示・情報開示のほか、牛肉以外についてもトレーサビリティ・システムの構築が求められよう。食品等の生産、加工、流通、販売の各段階の情報を遡及して調査、確認できるようにするには、情報の内容としては、生産段階では品種、生産者情報、栽培方法など、加工段階では加工者情報、製造日、賞味期限、原材料など、流通段階では流通業者情報、輸送時間など、販売段階では販売者情報などが必要である。システムの確立により、食品の問題発生時における早期の原因究明や生産者と消費者の信頼関係を築くことができる。システム確立のためには、食品関係者だけでなく消費者も、食品の各段階における情報内容の十分な理解が必要となる。

さらに、都市・農村を問わず、地元でとれた農産物を地元で消費する体系、つまり地産地消シス

テムの構築も必要であろう。学校給食，地元スーパー販売，ファーマーズマーケット販売などとして取り組まれている。これらは輸送コストの低減，鮮度の保持，生産者と消費者との信頼関係の構築，

農業担い手の育成，食料自給率の向上，地域経済への貢献などの効果がある。食の安全性への信頼が根底から揺らぐ状況のもとで，注目の度合いがますます高まるであろう。

* * *

21世紀 COE プログラム 「ナノ未来材料」が目指す世界最高水準の研究教育拠点

拠点リーダー 工学研究科応用化学専攻 額 額 明 伯 (工化S47)

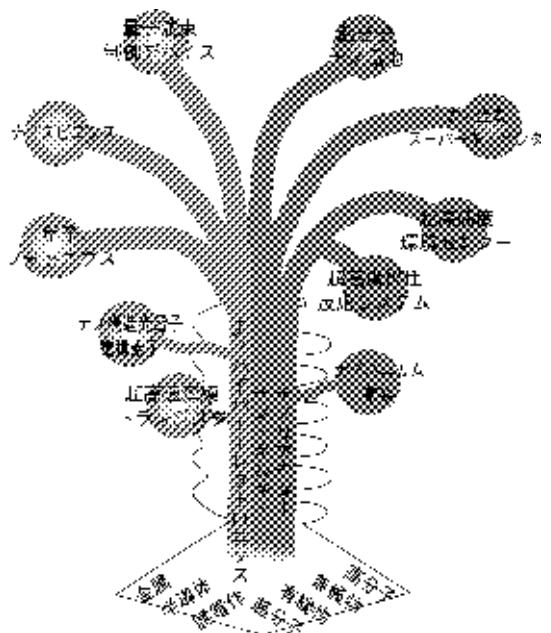
本学の応用化学専攻，電子情報工学専攻および生命工学専攻の博士後期課程の有機的横断による「ナノ未来材料」研究拠点が21世紀 COE プログラム 化学，材料科学分野で採択され，現在，「ナノ未来材料」を指向した世界最高水準の研究教育拠点を目指した活動が始まったところであります。本プログラムには世界水準を越えたナノ次世代材料を創出するとともに，学術研究の高度化養成機能および高度専門技術を有する博士の輩出機能の強化とその仕組みの構築が要求されております。この目的のために，これまでの科学研究費等の基盤研究費と異なり，特に博士課程の学生を含む若手研究者の育成プログラムに重点が置かれております。

ン，デバイスと言った研究手法を，本拠点では各専攻を有機的に横断する拠点形成によりナノデザイン（機能発現設計・マテリアルデザイン）→ナノファブリケーション→ナノデバイスとスパイラル的に発展する自己循環型の研究体制を構築することにより，化学系・物理系・電気電子系・生命系の専門家の統合的組織として本 COE を形成します。このように構築した本 COE 研究拠点では，究極的な原子・分子操作/制御を達成して先駆的なマテリアル・デバイスへと展開するとともに，世界最高水準の研究者を輩出する場を若手研究者に提供することを目的としています。

化学，材料科学分野では82件の申請に対して21件が採択されましたが，その審査過程では拠点を形成する教官の業績は言うに及ばず，学長のリーダーシップによる本プログラムへの大学の支援およびその支援方法などが厳しく考査され，事実，学長へのヒアリングが行われました。これは，大学として本拠点形成に対してどのような支援を行い，文科省からの支援が終了する5年後以降も本プログラムが継続されるような仕組みの構築の可能性を見たものであります。このような本プログラムの趣旨から約30名の拠点推進者の努力はもちろん，学長を委員長とする本拠点の研究推進本部による拠点プログラムの計画・実施・評価面での連携ならびに大学の大きな支援を得て世界水準の拠点形成に取り組む所存です。

最後に，本拠点推進者一同になり代わり卒業生諸氏の本拠点形成への暖かいご支援をお願いして報告を終わりにさせていただきます。

次に COE 「ナノ未来材料」拠点について簡単に述べさせていただきます。本 COE 研究拠点では，本学の将来構想の MORE SENSE*（*脚注参照）（美しい地球持続のための全学的努力）の実現を目指した「ナノ未来材料」技術の開発をミッションに据えております。そのためには，これまで各専攻間でバランスを欠いたデザイン，ファブリケーシ



ナノ未来材料の樹

* MORE SENSE : Mission Oriented Research and Education giving Synergy in Endeavors toward a Sustainable Earth

おかしな食文化

獣医学科 小原嘉明 (農S39)

「飛んでいるものは飛行機以外は何でも食う」。「走っているものは自動車以外は何でも食う」。「四つ足のものは机以外は何でも食う」。「二本足のものは人間以外は何でも食う」。これはつい先日訪れた際に、中国の長春市にある東北師範大学の先生から聞いた話である。中国人は何でも食糧にしてしまうことを語った笑い話であるが、いかにも食の天才、中国人ならではの話である。

実は食は人間に限らず、全動物の最大関心事のひとつである。食が動物の生命維持の基本であることを考えれば、これは当然である。ところがこの食糧の獲得、必ずしも簡単ではない。特に他の動物を捕らえて食べる食肉動物となると、食糧の確保は容易ではない。なにしろ食われる方も命がかかっているのだから、簡単には捕まらないからだ。そのため動物は、餌となる動物を疑似餌で騙したり、色仕掛けで誘惑して捕食するなど、餌取りの術にあれこれ創意工夫を凝らしているのである。

しかし動物にとって頭が痛いのは、どのような餌取りをするのであれ、餌取りのエネルギー収支決算を黒字にしなければならないことである。つまり、(餌取り行動で獲得したエネルギー=利得)-(餌取り行動で出費したエネルギー=コスト) > 0 、という要件を満足しなければならない。もしこの(利得)-(コスト)の収支決算が負になるような餌取り行動をする動物個体がいたとすれば、その個体は餌をとるたびにやせ細り、早晚死ぬことになる。実際、動物はそうならないために、あるいはこの収支の黒字が最大になるように、いつ、どこで、どれだけの時間餌を探したらいいか、どの餌をとったらいいかなど、いろいろ「留意」していることが知られている。

実は人間も500万年の長きに及ぶ歴史の大部分を、他の動物同様、自然に存在する動植物を食糧として利用し、生きのびてきた。いわゆる狩猟採集の生活である。しかしつい1万年前のこと、この動物同様の食生活に一大革命が起こった。農業革命である。このとき人間は初めて農耕や牧畜によって自ら食糧を生産するという、動物界で他に例を見ない一大革命を成し遂げたのだ。以来、人間は作物に改良につぐ改良を加え、食糧の増産につとめてきた。その影響は人口増に最も顕著に現れた。それまで世界人口は乏しい食糧が制限要因となって、ずっと500万人レベルに低迷していた。

ところが農業革命と農業技術の向上による食糧の増産によって、人間の高い潜在的繁殖力を抑えていた重石が取り除かれた。その結果、人口は急速に増加した。現在、世界人口は農業革命以前の千倍を超える数十億に達し、なお増加の一途をたどっている。

食糧増産に加えて人間は食物を煮炊きする術を手に入れた。これによって食物は生の状態では得られない風味を創り出し、食欲を刺激した。人間はさらに塩、醤油、砂糖、コショウなどの調味料や香料で食物を美味しくした。盛りつけに工夫を凝らして食欲を誘い、食器や食卓にも細やかに気配りし、ライティングや背景音楽にも意を凝らした。これすべて食文化である。

しかしこれが思わぬ落とし穴となった。食文化は、すなわち食欲を刺激するための仕掛けだからだ。それが証拠に、米やサツマイモを生のまま、味付けなしで食べてみるがいい。とてもそんなには食べられないだろう。それを食文化はこれでもか、これでもかと食欲を刺激し、人をして過食に走らせ、必要以上の栄養を摂取し、自らを不健康な豚にしてしまうのだ。かけなくてもいいお金をかけて、である。そしてそのあげくお金をかけて、やれダイエットだの、やれ痩せ薬だのである。何という皮肉なことか。食文化は人間をして何と不思議な動物に仕立ててしまったことか。

ところで冒頭の四番目の笑い話であるが、これは日本を含む近代資本主義国家については誤りである。これらの国の人々はまさに人(のニーズ)を食糧資源として生きているのである。例えばA社に勤めて生計を立てている人は、A社の製品が欲しいという人々のニーズを食糧資源として生きているのである。これほどの共食い社会は他の動物には見られない。



選ばれるという懸念もありました。しかしながら、いざアンケートの内容を見ると、学生諸君は、たとえ厳しくても学生が理解できるように努力して教えてくれる先生を望んでいることがわかったのです。

各学科から候補者がノミネートされると、12月末に教務委員、歴代のベストティーチャー、また新任の先生方も招いて勉強会を開き、そこで候補者は自らの授業に対する姿勢や工夫点を「講義」することとなります。他の教員の前で「講義」する機会というのは、たいへん貴重な体験でありました。質疑応答も活発に行われ、候補者の努力と熱意が真に問われる場となります。最終的には、その講義を聴いた審査委員の間で最優秀講義賞受賞者が選定されるのです。

私は本学着任当初から、自ら担当している授業で授業評価アンケートを実施し、学生の声を常に聴くように心がけてきました。そこで改めて実感したのは、本学学生の潜在能力の高さです。特に、些細な疑問にも自分をごまかさず、納得いくまで理解したいという意欲を持っているという点が印象的でした。そうした学生の勉強意欲を引き出すためには、「教える技術を磨くことよりも、高い理

念を貫くことが重要」だと思います。今のところ、自分にとっての「高い教育理念」とは、「混沌とした状況で問題を発見し、整理し、解決に導くというプロセスを学生とともに追求していくこと」と考えていますが、今後も高い理念とは何かを常に自問自答していこうと思っています。

ベストティーチャーの勉強会を通して私自身が痛感したのは、「試されるのは、教官の真剣さと妥協を許さない努力」であるということでした。私たち教員に、高い理念を貫く強い意志があれば、学生はそれに必ず応えてくれるものと信じてやみません。



*

*

*

クローンマウスと ES 細胞

生命工学科 齊藤美佳子 (工化H1)

クローンヒツジのドリーが衝撃的なデビューを果たしてから、早くも5年が経ちました。この間の研究の進展はすさまじいばかりで、ヒツジ、ウシ、ブタ、マウス、ネコでクローンが誕生しています。一見、いろいろな動物でクローン動物が誕生しているので、誰でも簡単にできると思うかもしれませんが、世界中でクローン動物作出に成功しているのは、ほんの数名しかおりません。

それくらい非常に難しい技術を要するのです。生命科学の研究対象としてクローンが純粋に興味深い題材であることは疑いのないところだと思います。一方、科学者はもちろんのこと、宗教家、政治家はもとより、これまで発生学・生殖学はおろか、生物学などにはほとんど興味を示さなかった一般の人々を巻き込み、クローン研究の是非が議論されています。それだけクローンの誕生が大きなエポックであったのと同時に、得体の知れない存在として脅威を与えているのかもしれません。クローン研究に対する賛否両論が錯綜する中で、クローン人間につながる研究として危惧する声もあり

ますが、クローン動物を作出する技術は、単に個体作りのみではなく、細胞の脱分化や初期化といった問題をも解決する手段として利用できます。

個体の発生には、緻密に仕組まれた発生のプログラムの正確な遂行が要求されるわけですが、クローン胚ではこの時間軸がもの見事にリプログラムされます。しかし同時に、多発するクローンの多様な異常は、このリプログラミングの誤りと考えられ、その対象となった遺伝子の数により異常の状況と程度が異なって生じているのであろうと推測されています。ドリーの生みの親である Ian Wilmut 博士が述べているように、「クローン個体はすべて何らかの異常を伴っている」というのがクローンのもうひとつの実態です。

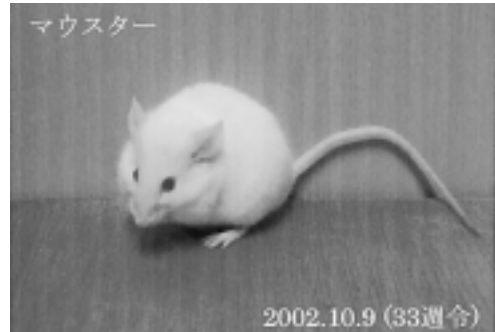
これに加え、特定の遺伝子だけを改変できる「ジーンターゲットティング」の手法が成功しており、幹細胞、脱分化、遺伝子操作といったものが、再生医療や細胞移植治療を可能にするきっかけになりつつあります。これらの発展に、クローンの基礎研究が貢献するところは極めて大きく、細胞レベル

でのクローン研究の重要性が指摘されています。

一方、ES 細胞という全能性の細胞(より正確には、ほぼ全能性の細胞)が樹立され、多くの実験成果を生み出し、将来は再生医学に利用されようとしています。未分化な状態を維持しながら増殖し続けるこの細胞は、細胞分化の全能性を探るうえで最も優れた材料となっています。また、核移植クローンと ES 細胞の技術を組み合わせた新しい医療の可能性も示される時代になってきました。しかし、実際に ES 細胞の医療への応用を考えた場合には、いくつかの大きな問題点を解決する必要があります。そのひとつは、「ES 細胞をある特定の細胞にどのようにして分化させるか」という点です。また、「いかにして全能性を維持したままで ES 細胞を増殖させるか」という問題点も克服する必要があります。そこで、全能性を保持するために未分化状態を維持したままで増殖させる技術が必要になるわけです。これまでの研究から、マウス ES 細胞の場合は培地にサイトカインの一種である LIF を添加することで維持できることが知られています。

クローンと ES 細胞は、再生医学やクローン人間というような医療や倫理といった面で興味を持たれ、マスコミに頻繁に取り上げられるトピック

スです。そのような一般的な興味だけではなく、細胞分化を始めとする研究分野において、いくつもの重要な課題を含んだ新しいテーマでもあります。私達も、このクローン動物(マウス)作出に挑み、見事にマウスでは世界で4番目にクローンマウスの作出に成功し、マウスター(マウス+スター)と名付けました(写真1)。また、生薬から ES 細胞を分化させることができる因子を探索する研究も行っています。既に、強心などの効果のある生薬を加えることで、心筋様細胞に分化させることに成功しています。今後、この新しい時代の研究にどっぷりと漬かって、生命工学を発展させたいと思っています。



農工大初のクローンマウス(マウスター)

支部総会の活性化について

総務部・支部担当 加藤 誠(農工S44)

私は、総務部の支部担当理事という同窓会の一
番大切な役職をいただきました。皆さんは、何れ
かの、どこかの同窓会支部に所属しています。同
窓会はその組織の活性ある運営があってこそ支部
存続の意味があります。支部の運営には、役員の方
々が多大の努力を払っておられます。しかし、ど
の支部総会もだんだん先細りの感じが致します。
それは、長く続いております日本社会の経済の低
迷に端を発していることはもとよりですが、若い
人たちの組織離れの感覚が増大したものと思われ
ます。

特に、同窓会は、「同じ学校を卒業した」という
だけの縁の人から構成されています。この会に所
属することが利益に結びつくことは、直接期待で
きないものになっています。“参加者の増加”に対
しては、特効薬は無いようであります。それは、
参加する人々の中から自然発生的に意義ある行動
が生み出されることを期待するのみであります。

そのためには、会員個人には、

第一には、まず参加する

第二には、同窓の方々の呼びかけにより参加
者の増加をはかること

また、執行部の方々には、

第一には、参加しやすい会費で開催すること
(会場費のかからない、公共の施設などを借
用するなど)

第二には、参加者相互に、情報交換の場所と
して活用するように、大いに発言のチャン
スが与えられるような場を設けること

第三には、会報などを発行して、同窓会支部
総会総会時のみならず、意見交換や情報交
換の場を提供すること(メール、ホームペ
ージの開設)

などが考えられます。

次代を担う若い人たちに魅力がある支部運営に
なりますよう支部会員個人と執行部の皆さまの心
がけをたまわりたいと思います。ご意見をいただ
きたいです。

部会・支部だより

◎獣医学部会総会報告◎

平成14年度幹事会、総会は7月13日(土)農学部432教室で開催された。会計報告の後、部会活性化の一步として、年2回発行の「部会便り」に、1人50字以内の「通信欄」を設けることが説明され、次号45号(平成14年11月発行予定)より掲載が開始される。現在50通あまりの記事が集まっている。引き続き、平成16年4月よりスタートする国立大学独立法人化の概要と農工大の準備状況が事務局より紹介された(写真、小林(S31卒)撮)。独法化後の国立大学は6カ年計画に従って役員会を中心に運営され、計画達成状況は大学学位授与・評価機構による評価を受け、この評価が大学の予算配分にも反映される事から、今後、大学間の競争が激しくなると予測される。さらに、獣医師教育6年制以降に伴う、20年来の課題である獣医学科の再編問題の現況についても事務局より報告され、現状は再編がどのようになるか流動的である旨の説明があった。総会後の恒例の研究講演会は、須永裕氏(農水省、動物検疫所所長、S49卒)「動物検疫を取り巻く状況と課題」、柴内裕子氏(赤坂動物病院、院長)の2氏にお願いし、その後、懇親会を開催、歓談の一時を持った。



神田尚俊(獣医S45)記

◎神奈川県支部総会◎

平成14年度神奈川県支部総会を、7月13日横浜市にある「もみじ坂会館」で開催しました。

総会は、小林行塚支部長をはじめ28名の会員の参加があり、支部長挨拶に始まり平成13年度の決算報告及び平成14年度の予算案が原案どおり承認されました。

当日、同窓会本部から農学部に加藤誠教授を来賓としてお迎えし、「東京農工大学 大学案内2002」のパンフレットを参考にしながら、最近の大学の状況をうかがいました。なかでも、先進の研究として、平成11年度共同研究受入件数(文部科学省)が87件で全国8位と大学の活躍ぶりがうかがえました。

総会に引き続き懇親会に入り、鈴木弘文(製糸S22)先輩の乾杯に始まり、同窓生同士和やかな時間を過ごしました。予定時間を少々オーバーして記念撮影を行い、来年の総会の更なる盛況を約し古橋圭介(獣医S30)先輩による一本締めで散会となりました。



日下義行(農工S59)記

◎2002年岩手県支部の集い開催報告◎

2002年の岩手県支部の集いは、6月22日(土)の午後盛岡市のホテル・メトロポリタン盛岡において、本部から同窓会理事長の小原嘉明先生にご出席をいただき、開催することができました。岩手県支部の会員は170名ほどと多くないため、まだ毎年度開催という形とはなっておりませんが、昨年2月に続き開催しましたところ18名の参加をいただきました。

特にも昭和8年農学卒業の堀忠雄様には、短い時間ではありましたが特別参加いただき、戦中戦後の満州等における同窓諸先輩方の苦心惨憺についての逸話をお伺いしました。また、小原嘉明先生からは、短い時間ではありましたが、動物行動学についてユーモアを交えてご講義いただきました。小原理事長からは、今後の支部の盛り上げについて秘伝を授かりましたので、これを糧として小さい支部ではありますが、同窓の輪を広げるとともに岩手県から本学を志す方が増えるよう努め

ていかなければ、と同窓会支部の役割の大きさを感じております。



深澤 光 (林S56) 記

◎群馬県支部総会◎

群馬県支部(支部長大河原清一・養蚕S24)平成13年度総会は天候に恵まれた5月19日18時より伊香保温泉崖権旅館にて会員37名出席のもと盛大に開催されました。

総会は支部長挨拶、久保田順一郎支部顧問(久保田富一郎氏ご子息)挨拶の後、議事に入りこの一年の事業活動及び会計報告並びに平成14年度事業計画などが満場一致で承認されました。

懇親会に先立ち、支部長の県人事委員会会長就任及び市川平治会員(林院S47)の倉渕村長当選を花束贈呈と拍手、乾杯で祝福し、季節の料理に舌鼓。恒例の自己紹介、近況報告に話題は弾み、いつしか時の経つのも忘れて語り合い、楽しいひと時を過ごしました。2次会は伊香保温泉石段にある「再会」で……。久保田富一郎前東京農工大学同窓会長(林S16)がいつも楽しみにしていたこのお店も、その晩は遅くまで大勢の会員で盛り上がり、美味しい酒と肴で各自の活躍と次期総会での再会を誓い合いました。



岡野幸治 (林学S62) 記

◎三重県支部総会の開催◎

平成14年度三重県支部の総会が9月8日に津市

内で開催されました。

本部からはお忙しい中、農学部助教授の渡辺元先生にお越しいただき、大学の最近の様子についてお話しいただきました。

出席者は17名で、今春卒業された穂高さん、小谷野さんのお二人に初参加していただき、場を盛り上げていただきました。

20歳台前半から80歳台半ばの幅の広い世代が集まって、家庭のこと、仕事のこと、趣味のこと、日本の現状等についていろいろなお話を伺うことができました。

支部長には、吉田 譲氏(獣医S45)を再選し、幹事も全員再選となりました。



古野 優 (獣医S60) 記

◎島根県支部総会◎

平成14年度の支部総会は、8月30日(金)に玉造温泉ホテル玉泉で開催された。

本部総会の報告後宴会に入り、今春卒の松本幹史(環・資)氏と松江での学会に参加していた学生の加藤君(連大博2)を迎え、大学の近況を詳細に知ることができた。大学では、改組のためか最近駒場小唄などあまり歌うことがないことを知り、熟年の先輩達は残念がり、昔の各科の歌の継承を願って合唱した。

話題は、農学部出身者のみのためか自然に農業問題から環境保全・動物との共生など、深夜まで意見交換が行われた。

出席者は10名と少なく、とくに工学部出身者の



参加がなく残念でした。来年はさらなる参加の呼びかけを話し、次会を楽しみにして散会した。

中尾清治（農工S34）記

◎新潟県支部総会◎

平成14年度新潟県支部総会は、6月7日（金）新潟市内のクオリスビルにおいて27名の参加をもって開催されました。

布施支部長のあいさつの後議事に入りました。会計報告に続き役員改選が行われ、布施支部長から続投を快諾いただきました。

また、近年若手の出席が少ないことが懸案となっていました。今後は各学科に世話人を置き、出席を呼びかけることとしました。最後に本部代議員より、大学の変貌の様子などが報告されました。

懇親会は世代を越え母校での思い出や旧友のことなどに花を咲かせ、大いに盛り上がりました。総会もあつという間に終わりの時間となり、みんなまだ名残惜しそうに、来年の再会を誓いながら散会しました。



村山康則（農学H3）記

◎福島県支部総会◎

福島県支部（支部長小松恭雄 林29）第37回総会は、梅雨の中休みに恵まれた6月29日、福島市内「セレモニーホール・フロンティア」にて、会員47名出席のもと本部から理事の生原喜久雄教授を迎えて、盛大に開催されました。

総会は、小松支部長の挨拶の後、議事に入りました。議題にあげられた平成13年度の活動及び会計報告、平成14年度事業計画等が満場一致で承認され、また支部役員には小松支部長が満場一致で再選されるなど今後の支部体制が決定されました。

その後、来賓の生原教授には、来賓挨拶と併せ

て母校の近況を御紹介いただき、出席者一同、懐かしさと時代の変遷に感無量の面もちで拝聴しました。

恒例の懇親会では、母校の昔話や自身の近況報告などに花が咲き、つつい時間の経つのも忘れて楽しいひとときを過ごし、来年の再会を心より誓いあって、盛会のうちにお開きとなりました。



矢島清行（蚕H1）記

◎広島県支部総会◎

昨年開催できなかった支部総会が、7月21日に広島市内の鯉城会館で16名の参加により開催されました。昭和10年代前半に製糸教婦学科を卒業された小松トモエ、野村眞佐子、増原チヨ子の3先輩が元気なお姿を見せていただきました。総会では、低調な参加の支部総会を活性化するための開催方法や開催場所についての提案がありました。今後の課題とすることになりました。また、役員は貞森昭宏支部長（工化S39）と三宅信行連絡員（環保S55）が引き続き努めることになりました。総会後の懇親会の中で近況報告を行い、各場面での皆さんの活躍振りが語られました。その中で瀬戸内海に浮かぶ大崎上島でブルーベリーの栽培をされている横本正樹さん（農学S48）は後日NHKの全国放送でその様子が放映されていました。和気藹々とした雰囲気での懇談の後、再会を約して散会となりました。



三宅信行（環保S55）記

ク ラ ス 会 だ よ り

◎多摩留会(獣医学科S31年卒クラス会)◎

平成14年3月10～11日に、長野県松本市の浅間温泉「いづみ荘」において、クラス会を開催した。会員26名(会友2名を含む)のうち、今回は9名が参加した。

現地集合で、10日午後5時までには顔を揃え、温泉で汗を流した後、6時から宴会に入る。司会是小嶋君が務め、小林君の音頭で乾杯して、料理長お薦めの会席料理コースに舌鼓を打つ。飲むほどに開業している泉川・関水両君は患畜の病状と治療法で話が弾み、薬品関係の小嶋君は最近の薬品の話で勉強になった。他の諸君もまだまだ何らかの仕事に就いているようで、小生も中国訪問時のエピソードを紹介して大いに賑い、約2時間半の会食を終え記念撮影をして夫々の部屋にて更に語りあった。尚、次回の会は馬場君の担当で、岡山で開催することを決めた。

翌日は、朝食後玄関で写真を撮り、お互いの健康を祈りつつ解散となった。

[出席者] 池田勝彦, 泉川大海, 笠木 朗, 小嶋健司, 小林茂雄, 下田貫三, 関水 隆, 平方明男, 吉田和雄



平方明男 記

◎昭和37年卒農芸化学科一泊クラス会◎

皆が元気なうちにと平成14年3月16日(土)一泊クラス会を実現することができました。

米国多発テロ直後の案内でしたが、過半数の参加(17名)を得てほっとしました。

交通の便とお値段を考慮して熱海の厚生年金会場(ハートピア熱海)を選び、宴会場を確保しました。どの部屋からも初島が見える見晴らしの良い

施設です。

宴席では欠席者の消息や大学の状況など報告。病気や仕事の都合で不参加の仲間には残念ですが、熱海温泉と海の幸豊かな料理に加えて、40年ぶりに再会できた仲間と元気な現役の活動を肴にしておおいに談笑。

男性だけのクラスで色気はありませんが、幅の厚い年齢層で、それぞれ味のある人生を話題に花が咲き、お互いの老後の人生や健康に、知恵と元気を与えてくれたものと思います。

翌日は天気よく、希望者で近くのMOA美術館へ行き、それぞれ思い出を胸に、また、次の再会を思いながら帰路につきました。



土屋积令 記

◎ポプラ会(昭和30年獣医学科卒)◎

平成14年度の会は、昨年の会が入学50年に当たることから、大学に集まろうということになり、5月11日(土)午後1時に農学部本館玄関前に集合した。(会員17名, 夫人6名)

当初の雨の予報が幸い曇空となり、先ず獣医学科の会議室で林谷秀樹助教授(獣医S58)より大学近況を伺う。午後2時から学内を見学。50年前の様子偲びながら、変化した現状に感無量の者もいたようである。



午後4時からホテルコンチネンタル府中で懇親会に移動し、石坂君の音頭で乾杯、会食に入る。10年間中国でポリオ対策に尽力されていた原君から、ポリオ撲滅までの苦労話を聞く。その後は大いに飲み食い語りして、午後6時次回(来年は東南アジア旅行計画)の再会を約し、皆の健康を祈念し散会した。

立石洋見 記

◎昭和25年農科卒 同機会◎

平成14年5月1～2日に富山県氷見市泊・磯波風(イソップ)で同機会(どうですかい)を開催。同級生12名、同夫人6名が参加。世話役は富山県出身の内山晃君。1日夜は富山湾の海の幸尽しと銘酒、持ち込みのワインで盛り上がる。翌日は砺波市で開催中のチューリップフェアを見物し、次回は山梨組の世話で来年9月頃開催を約して散会。

出欠回答のあった32名中、体調不良で欠席が12名、出席者の中にも杖代わりに家内を同伴という人が3名いた。齢70を越えたとはいえ、ほぼ半分が体調不良にはびっくりした。お互いに心身の健康に留意し、来年も会いましょう。



芦澤正和 記

◎昭和34年繊維工学科卒一三四会一◎

我々のクラスは卒業時25名と少なく、そのためかまとまりが非常によく、毎年「三四会」と称してクラス会を開いている。今年は5月12日から13日に信州まつかわ温泉「清流苑」で開催した。出席者は13名、関東から中部地区の出席者が多かったが、遠くは宮崎、広島から馳せ参じてくれた。我々の年代になると、ほとんどが第一線を引いているが、病気がちの人も多くなる。今回の参加者の中にも病気にもめげず参加してくれた級友がおり、この会の結束の強さを感じ入ったところである。それにしても我々のクラスは歳をとってもよく飲み、よく食べる。これも育ち盛りにひもじい思いをし

たためであろうか。

今年5月是不順な天候が続いたが、12、13日は参加者の行いが良かったのか晴天に恵まれ、13日には天竜舟下りを楽しんだ。弁天港から天竜峡まで約1時間、伊那節のようにしぶきに濡れながら。途中船頭が昔はここら辺は一面桑畑であったとの説明に、一同昔の小金井構内の桑畑を思い出した。

飯田で五平餅とそばの昼食をとり、来年(紀伊白浜付近)の再会を約し、飯田駅で散会となった。



柴 義勇 記

◎旧繊維学部三々五々会2002を開催◎

旧繊維学部昭和35年卒組は、養蚕、製糸、繊維工学、繊維化学の4学科あわせて約100名。そのうち約40名が旧西ヶ原寮生であった。昨年、寮生の同期会を開催し45年ぶりの再会を楽しんだ。それにひきつづき通学生もふくめた学年同期会をここに言う三々五々会と称して気ままに集い好評であった。その2002年版をさる8月3日(土)池袋で開催した。全国に散らばる同期生仲間から関東中心に28名が参加し、宴はなんと3時から9時まで歓談につぐ歓談が続いた。愛知からの小林、小室、宇都宮の本野や途中転学して国際線機長パイロットになった橋本など珍顔の話や、会に寄せられた各地各人からの近況の報告など、武蔵小金井時代にもどりつつお互いの健闘、健康をたたえあう至福の会合であった。聞くところではクラスの仕切りをはずした学年横断の同期会はめずらしいとの事、我々は今後も継続開催を確約して散会した。



永島 武(織化S35) 記

◎昭和52年卒農学科クラス会◎

卒業後25年目のクラス会が、8月3日、みちのくの夏祭りのひとつ「さんさ踊り」で賑わう岩手県盛岡市で開催されました。初めての地方開催のため、参加者はやや少なかったものの、濃畑氏の家族も加わり賑やかになりました。踊りの見学後、宿泊先のホテルで一次会、近くの店で二次会と楽しく盛り上がりました。皆40代後半、顔のしわは多くなり髪は白くなったり薄くなり始めたりと、外見は変化していても、懐かしい顔を合わせれば学生時代に立ち戻り、気のおけない会話が飛び交いました。また、会の直前に急用が入り参加できなくなった津田氏から電話が入り、出席者と旧交を温めました。青森県で農業を営む梅田氏は自家製のりんごジュースを差し入れてくれ、翌朝

にはおみやげにもいただいて帰路に就きました。なお、松原氏は、帰りに、同じクラスであった故竹野文一氏の実家(岩手県宮古市)にお参りをし、ご健在のお母様に大変喜んでいただいたとのこと



佐藤暁子 記

掲 示 板

記念碑「東京高等蚕糸学校発祥之地」の復元

東京農工大学工学部史料編纂小委員会

本記念碑は1991年10月財務省印刷局東京病院正門脇(地下鉄南北線西ヶ原駅)に建立されましたが、1998年5月から病院改築工事のため一時撤去され北区教育委員会により保管されていました。本年7月はじめ、病院正門脇歩道橋の近くで見とおしの良い場所に設置されました。見栄えのある記念碑が、末永く存続してほしいものです。

この間の経緯を述べますと、病院完成近くになってから北区教育委員会から記念碑の財産権がどうなっているのか、教育委員会としても財政事情が悪いため考えて欲しいとのことでした。当委員会は記念碑の管理等に関係はないようになっていくと聞いているし、旧記念碑建立協賛会副会長である小野二郎先生も、再度募金をするわけにはいかないとっておられる。問題は、設置当時寄付手続きをしていなかったことにあるので、改めて昨年9月寄付申込書を教育委員会に小野先生名で提出しました。このような事情の下、教育委員会側の多大なご協力を頂いて、ようやくのこと復元工事着手に至りました。

基礎は土中に丸穴を数本掘り、コンクリートを流し込んで土台とし、重い石碑に十分に耐えられるようにした丁寧な工事が行われました。教育委

員会からは、「記念碑を貴重な資料として大切に保管する」趣旨を書き添えた「報告」を受け取っています。北区教育委員会の忍田隆幸係長、中野守久学芸員、印刷局東京病院の磯崎敏和課長、加藤隆三係長、および(有)富士石材の似内賢社長に大変お世話になりましたことを申し添え、この場を借りて厚くお礼申し上げます。なお、当委員会は北区と東京病院との大学の窓口の役割であることを委員会で申し合わせています。また旧工学部校史編纂準備委員会は、委員会組織変更により本年10月1日より標記委員会名に変わりました。



(文責：澤田孚夫)

農工大 TLO 報告

農工大ティー・エル・オー株式会社 代表取締役社長 伊藤 伸

教職員や卒業生の方々の支援を受けて設立した農工大ティー・エル・オー株式会社は、去る10月1日に1周年を迎えました。みなさまの暖かいお力添えをもって、順調に事業を拡大しております。この場をお借りして、心より御礼を申し上げます。

1年の間にひとつ日本一のものできました。マッチングファンドと呼ぶ公募型共同研究の採択件数です。追加公募も合わせ、農工大 TLO の採択は6件に達しました。これは、東京工業大学の TLO (技術移転機関) や名古屋大学などが参加する中部 TLO などを抜き、驚くことに全国の TLO としては最高の件数です。

特に9月の追加公募では、32件の応募のうち採択されたのは9件でしたが、農工大 TLO の採択は3件。全国の採択件数の3分の1をたったひとつの TLO が占めてしまったのです。

マッチングファンドは、正式には経済産業省の大学発事業創出実用化研究開発事業といえます。企業が TLO を通した大学との共同研究やその成果の管理に1500万円以上の資金を提供すれば、そ

の2倍の資金を補助金として国が提供します。特許など共同研究の成果は TLO が管理し、その代わりに、資金を提供した企業にはその特許などを独占的に実施許諾します。いわば、共同研究と実施許諾が融合した技術移転の手法というわけです。

この制度は、大学における研究資金が増えるばかりでなく、TLO にとって非常に大きな恵になります。TLO に優れた保有特許が増え、共同研究の管理の部分は収益に寄与するからです。

マッチングファンドは、企業と国の提供資金を合わせると最低でも1件4500万円の大規模プロジェクトです。農工大 TLO では6件が進行していますので、農工大 TLO が管理するプロジェクト総額は3億円を超えています。

こうした華々しい共同研究プロジェクトが実現したのは、農工大の研究成果への産業界からの熱い期待が端的に現れたためと思っています。今後とも技術移転の先端分野に挑戦をして参りますので、引き続きご指導・ご支援をよろしくお願い申し上げます。

キャリア・アドバイザー（進路相談員）制度がスタート

櫻井 邦雄 (農化 S37)

我々のところは学生の人数も少なく、就職先も限られていたせいもあって、就職活動は本人の潜在力や性格を良くお見通しだった、研究室の先生方の紹介、推薦で企業の面接を受け、すぐに合否が決まるというのが一般的な姿でした。昨今は学生の数も増え、就職先の企業も多様化し、先生方も大学改革、COE、TLO などで超ご多忙、一方で IT 化が進み、就職活動は先ず企業のホームページに学生が個人的にアクセスするところから始まるようです。学生は決して豊富とは云えない知識、経験をたよりに自分一人で進路を決めて行かねばならず、しかも内定までに時間がかかります。いままで何かにつけて過保護な環境下で育ってきた若者にとって、これはかなり異質な経験で、進路が決まるまでは卒論の実験にも集中できず、精神的にもかなりの負担になっているようです。そこで今回学内にキャリア・アドバイザー制度を設け、OB を起用して希望する学生の進路の相談にあずかり、支援

を行うことになりました。具体的には自己分析(自分は何か、何をしてきたか、何がしたいか、何に価値をおくか)、進路候補の情報収集(何が期待されているか、何を期待できるか)、これに基づく進路の選択、さらに就職希望先への自己アピールの仕方(セールスポイントの明確化、文章表現、面接態度)の助言です。こうした、きわめて主観的で一人で考え込んで、どうどう巡りに陥りがちな事柄をできるだけ整理、客観化して、外から見えるかたちになるよう援助することが狙いです。10月から農工両学部でこの制度はスタートしました。わたくしの場合は週1回半日、農学部で学生課に設けられた相談室で、希望する学生諸君の話を聞き、一緒に考えています。制度が出来ればすぐに効果が出るものではありませんが、継続は力なりで、若い知性ととの交流を楽しみつつ、ときにはそのエネルギーをもらい受け、着実にこの仕事を続けて行きたいと思っています。

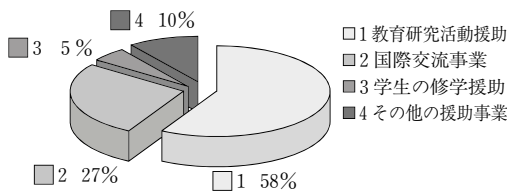
東京農工大学後援会の活動

▼平成14年度(平成14年4月～15年3月)収支予算規模については、更に厳しさを増してきている経済環境のもとで、前年度実績に比較しても低水準となっております。

今年度の大学に対する教育援助額は、8百万円となり、既報のとおり平成9年度当時の水準とせざるを得ない状況となっております。

(助後援会発足(昭和54年)以来、平成14年までの援助事業額の累計は約2億5千7百万円に達しており、大学の教育研究の側面的支援を実施してまいりました。

また、平成6年～14年度(予定)の教育援助累計額は約9千9百万円となりますが、その教育研究事業内容は次の図のようになっております。



平成6年～14年度(予定)教育研究援助額 累計百分率

このように、援助の9割近くが研究活動、国際交流の推進などにあてられ、その恩恵は、特に活

発な研究活動、教育研究環境の充実、大学改革の維持等様々な形で、在学生および卒業生に寄与しております。

今日、東京農工大学は、農学部5学科、工学部8学科、大学院5研究科を擁し、なかでも、農学および工学を融合し設置された生物システム応用科学研究科あるいは化学、材料科学などの分野に見る工学研究科など広範な研究領域、施設を擁し、先の21世紀COEプログラムの中では2分野が選ばれることとなり高い評価を得ております。

▼こうした大学の教育研究活動に対する当後援会の援助活動は、財団の基金によって運営されております。この基金の源泉は卒業生、大学関係者、入学生、在学生等の父母等による賛助会費と基金からの利息収入が主なものです。しかし、昨今の金融事情からしても基金の充実をはかるために皆様方からのご協賛を是非お願いいたしているところです。

▼(助東京農工大学後援会へのお問い合わせやご連絡は、事務局 TEL042-364-3328 FAX042-335-3500へお願いいたします。また、後援会の組織や活動内容などについてはホームページ(同窓会と共通アドレス) <http://www.tuat.ac.jp/~dousou/> 後援会欄をご覧くださいたく存じます。

▼ 平成14年11月1日現在同窓会会員数

区 分	現在会員数	うち今年卒業者数
農学・生物生産学部会	2,903名	65名
蚕糸生物学部会	2,165	—
植物防疫学部会	1,134	34
農芸化学・応用生命化学部会	1,891	51
林産・生物資源工学部会	1,275	22
環境科学部会	1,260	42
林学部会	1,879	—
生産環境工学部会	1,235	—
地域生態システム学部会	345	90
獣医学部会	1,983	42
(農学関係部会)	16,070名	346名
製糸・高分子・生命工学部会	2,636名	93名
機能材料工学部会	1,927	59
化学工学部会	1,567	62
応用分子化学部会	2,850	58
機械システム工学部会	3,908	136
電気電子工学部会	3,303	119
応用物理学部会	1,422	67
情報工学部会	1,139	73
(工学関係部会)	18,752名	667名
(正会員合計)	34,822名	1,013名
特 別 会 員	321名	
準 会 員	4,201	
費 助 会 員	2,507	
名 譽 顧 問	5*	
顧 問	7*	
(会員合計)	—	—

注1. 大学院連合農学研究科、大学院博士後期課程、大学院生物システム応用科学研究科修了者は、含まれていない。

2. *一部同窓生を含む。

慶 弔

慶 事 お祝い申し上げます。

H14年春の叙勲

梶井 功 元学長 勲二等瑞宝章

H14年秋の叙勲

金子 六郎 名誉教授 勲三等旭日中綬章

中島 英男 (獣医S30) 勲三等瑞宝章

向山 文雄 名誉教授 勲四等旭日小綬章

弔 事 ご冥福をお祈り致します。

岡本 奨 名誉教授

高橋 延匡 元工学部長

森田喜美男 (獣医S10) 元日野市長

川名 明 名誉教授

星野 邦夫 (獣医S33) 元教官

同窓会支部長及び支部連絡先(職域を含む)

(平成14年10月9日現在)

都道府県	支部長名	連絡員名	連絡先	電話
北海道	柳澤 秀夫 (農工28)	宇野沢正美 (農工46)	自宅	011-898-3198
青森	三橋修三郎 (獣医16)	野村 昌志 (農工39)	自宅	0177-38-3048
秋田	加藤 公朗 (林 30)	野村 俊悦 (農 44)	県雄勝総合農林事務所	0183-73-5180
岩手	堀田 成雄 (林 31)	深澤 光 (林 56)	県林業技術センター	019-697-1536
山形		今田 邦信 (蚕糸57)	県農業技術課	0236-30-3031
宮城	山内 健史 (林 45)	鈴木 正彦 (林 57)	県都市計画課	022-211-3134
福島	小松 恭雄 (林 29)	吉田 清 (製糸56)	県農業経済課	024-521-7349
茨城	永瀬 純一 (栽桑18)	川野 和彦 (林 50)	県農林水産部林政課	029-301-4016
栃木	渡辺 寿一 (獣医25)	南木 好樹 (農工58)	県農政課	028-623-2284
群馬	大河原清一 (養蚕24)	岡野 幸治 (林 62)	県環境生活部自然環境課	027-226-2874
埼玉	高野 稔 (養蚕33)	橋本 栄 (環保56)	県農林部林務課	048-830-4312
千葉	田村 健男 (製糸28)	内田 律夫 (養蚕47)	県病害虫防除所	043-291-6077
東京	細溪 美古 (林 25)	細溪 美古 (林 25)	サイビ国際総合学院	03-3829-3766
神奈川	小林 行塚 (織別30)	日下 康彦 (農工44)	県横須賀三浦地区農政事務所	0468-23-0210
新潟	布施 康正 (獣畜20)	村山 康則 (農H 3)	県新潟農政事務所	025-231-8187
富山	加茂 正三 (拓殖19)	石黒 哲也 (植防56)	県農林水産部普及技術課	076-444-3278
石川		北川 康一 (農工46)	県七尾農林総合事務所	0767-52-2583
福井	島田 昭男 (林 38)	野坂 雄二 (農工53)	県農林水産部農村計画課	0776-21-1111
山梨	鶴田 栄一 (織維19)	赤池 栄夫 (蚕糸49)	県地域政策課	055-237-1111
長野	竹下 悦男 (農 34)	倉石 和典 (蚕糸61)	県農政部農業技術課	026-235-7221
岐阜	麻生 迪夫 (林 38)	藤掛 雅洋 (林 62)	県中濃地域農山村整備事務所	0575-33-4011
静岡	戸塚 宏 (農 16)	丸山 淳 (林H 2)	県北遠農林事務所	0539-26-2314
愛知	春日井達造 (獣医16)	瀧川 桂三 (林 41)	県豊田土木事務所	0565-35-1311
三重	吉田 譲 (獣医45)	古野 優 (獣医60)	県南勢家畜保健衛生所	0598-28-2266
大阪	植田 栄一 (製糸32)	竹中 秀夫 (製糸50)	グンゼ(株)人事開発部	06-6348-1322
京都		西村 寿 (農工50)	京都府土地改良事業団体連合会	075-451-4137
滋賀	地平 寛治 (農 32)	森井 源蔵 (農工50)	県農政水産部耕地課	077-524-1121
奈良	武田 博之 (織化38)	武田 博之 (織化38)	自宅	0745-72-7635
和歌山	石谷 敏夫 (農実9)	中尾 俊二 (林 53)	自宅	0738-52-0586
兵庫	松岡 克巳 (獣医18)	三宅 昭仁 (林産55)	県六甲治山事務所	078-361-8574
岡山	永井 仁 (獣畜19)	関 哲生 (獣医H 7)	県農林水産部畜産課	086-226-7429
広島	貞森 昭宏 (工化39)	三宅 信行 (環保55)	自宅	082-822-4543
山口	赤木 道博 (獣医49)	岡本 賢一 (植防H 4)	県農試徳佐寒冷地分場	08395-6-0016
鳥取	西尾 邑次 (農17.9)	小林 寿 (製糸24)	自宅	0859-29-2644
島根	萬燈 末達 (農 16)	中尾 清治 (農工34)	自宅	0854-27-0251
香川	鳥飼 孝二 (獣医32)	河野 幸彦 (林 63)	県西部林業事務所	0877-73-2347
徳島	岡田 幸助 (林 28)	小杉純一郎 (林 63)	県林業振興課	088-621-2449
高知		寺峰 孜 (養蚕45)	高知学園短大講師	0888-40-1121
愛媛	重松 正矩 (製糸32)	池上 正彦 (蚕糸52)	県農産園芸課	089-941-2111
福岡	藤木 重喜 (拓殖18)	西田 晴二 (獣医41)	県農政部畜産課	092-643-3496
佐賀	貞松 光男 (農 34)	貞松 光男 (農 34)	自宅	0952-72-4368
長崎	本多 正二 (製糸32)	永尾 嘉孝 (農 42)	県農業技術課	095-823-1180
熊本	白石 武彦 (農工38)	猿渡 真司 (農工61)	県菊池地域振興局農林部	0968-25-4111
大分	漆間 友喜 (養蚕34)	近乘 偉夫 (農 58)	県農業技術センター水田利用部	0978-37-1141
宮崎	野上寛五郎 (林 39)	森 房光 (林 53)	県林務部山村対策室	0985-26-7157
鹿児島		遠矢 栄久 (林産50)	自宅	0992-67-6946
沖縄	島袋 哲 (獣医27)	川上 光男 (農 58)	県中部農業改良普及センター	098-973-5202
横浜会	三戸森領夫 (製糸31)	花田 正樹 (製糸49)	横浜生糸問屋協会	045-211-2726
千葉共済		計良 伸行 (獣医48)	県農業共済連家畜部	043-241-2171

事務局だより

▼武蔵野荘「50周年記念ホール」の同窓会の利用方法

創立50周年記念事業として実施された募金による同窓会記念会館は「農工通信」69号でもお伝えしたとおり一部を残して完成しました。本号表紙の写真がその外観です。

この記念会館は大学により「50周年記念ホール」と現在呼称されることになりましたが、その利用について次のような方法で行われます。

使用目的：同窓会事務局，支部，部会の会議等に使用

使用期間：午前10時～午後9時

休業日：12月29日～1月3日（年末年始）

武蔵野荘運営上必要と認める日

使用料等：（運営費）1回一律800円

（使用料）1時間当たり460円

使用申込み：使用日の前々日までに経理課給与共済係（042-367-5524）へ

その他：使用についての詳細問い合わせは経理課（042-367-5522）へ

▼部会・支部，クラス会だよりの掲載方法の変更

「農工通信」の魅力アップの「新しい試み」について、本号巻頭で理事長による提言がありました。

その中のひとつですが、従来、支部総会の概況について短文を寄せていただいていたのですが、本誌スペースの関係からも、十分とはいえない中での掲載でありました。件数も逐次増加して掲載を次号へまわさざるを得ない場合が多く発生してご迷惑をおかけいたしました。また、限られた文字数の中ですので、いずれも同じような趣旨の内容となってしまうざるを得ない事情もあったかと思えます。

支部総会開催などの活動は、同窓会活動の大きな柱の一つでもあり、会員の皆様にも各支部や全体の状況をご覧いただけるようにすることが必要なことと存じます。

そこで、今後は、2ページ内外の中で、各支部の活動状況が一覧でき状況をご理解いただけるような総合表とし、開催日時、場所、支部総会議事内容などの項目について要点を掲載させていただくようにしてはいかかと存じます。

これによって母校大学の近況の詳細、卒業同窓生の活躍の場などの具体的紹介、支部総会で提案された特定な話題についての紹介等々についてよ

り詳しく掲載することができるようになります。

従来からの支部総会のご報告は、従来どおり400字以内でお送り願ひ、当同窓会本部の支部総会記録保管原ファイルに写真（コピー）とともに保管させていただき予定となります。

できるだけ早い時期から以上のような方法に変えていきたいと思ひますので、皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

▼同窓会事務局，年末・年始休業のお知らせ

本年の年末・年始休業は、平成14年12月24日～平成15年1月6日とさせていただきます。

編集後記

農工通信の第70号をお送りいたします。この号から編集は、横山（農学部）・竹山（工学部）が担当いたします。宜しくお願ひ申し上げます。小原理事長が「新しい試み」に提言されている、「農工通信」の魅力アップに力を尽したいと存じます。今回は試みに、学園便りに様々な情報を載せてみました。トレーサビリティは、何を食べれば安全なのかよく分からんという、皆様の不安を解消できましたでしょうか。新聞等でご存じのことと思いますが、農工大学からは21世紀 COE プログラムに2課題が選考されました。その COE プログラムに関しての夢をつづってもらいました。ベストティーチャーでは、近頃の大学では、教育についても多くの改善がなされてきていることを理解されましたでしょうか。クローンマウスは「農工大も先端をやっているねー」と、知っていただいでしょうか。農工通信では、今後、学園便り等を通して、様々な話題を皆様にお届けしたいと思っております。（横山 正・竹山春子 記）

農工通信 第70号

平成14年（2002年）12月1日

発行所 東京農工大学同窓会

連絡先 〒183-8509東京都府中市幸町3-5-8

東京農工大学同窓会事務局

〈TEL 042(364)3328〉

〈FAX 042(335)3500〉

e-mail:dosokai@cc.tuat.ac.jp

URL <http://www.tuat.ac.jp/~dousou/>

振替口座 00120-9-93147番（加入者負担）

加入者名 東京農工大学同窓会